

立ち現われる世界

家中茂

「これはこれはあねさん。遠かところば、ようお出でなはり申した」

薄明のなかに浮かびあがるようにして現れた老人は、舞台下手から中央へとゆつくりと歩みでて、正面に向かい深々と一札する。そして、舞台奥の神棚をあらわす燭台に歩み寄り、うずくまって祈禱をはじめ。やがて、拍手を打って正面に向き直り、あねさんに語りはじめる。

「それではあねさん、わしが家の神さんば「統連れ」案内いたしましたしゅ」

この場面を幾度みたことだろう。砂田明一人芝居『天の魚』の冒頭である。一九八〇年二月の浅草木馬亭での公演を皮切りに、砂田さんはこの芝居をもって乙女塚勸進全国行脚の旅にでた。一九九二年までに五五六回上演されたこの芝居に、縁あつて、主に一九八〇年から八三年にかけて同行することになった。

「あねさん」とは、猿郷の女、すなわち、原作者の石牟礼道子さんのことだが、舞台の上には、黒装束に大きく口をあけた面の江津野老がみえるだけである。この芝居をみる者

は、こうしてはじまった、老人とあねさんのやりとりを舞台の上に見ていたつもりが、いつのまにか、自分が「あねさん」となって老人の語りを受けとめている。このとき、芝居が立ち現れているのは、演者と観客一人ひとりのあいだにおいてであつて、観客はすっかりその空間のなかに包み込まれて、個として江津野老と向き合っている。

最後の場面で、いま目の前でその語りを聞いていた江津野老が、すでに一九六九年、水俣病裁判提訴の年に亡くなつていたことを知らされ、そのときまでみていたのが夢幻であつたことにはあらためて気づかされる。手でつかめるようなりアリティのなかに没入して、現実とは異なる時空を経験していたのである。このように幾重にも「入れ子」の構造を経験することで、自分がいまあることの自明さを揺さぶられ、この世界だけでなく、幾層にもリアルな世界があることを知る。おわりの口上で、水俣の霊たちがやつてきて天井桟敷から私たちを見守っているようにすと述べられるのを聞くと、それもまたほんとうのことに思われた。

『石牟礼道子全集』の刊行に先立って、『不知火——石牟礼道子のコスモロジー』（藤原書店、二〇〇四年）という本がだされ、「悶え神」を読むことができた。ずいぶん以前に、「人は我が身ひとつの人生しか生きられぬ」というお話を、この「悶え神」という存在のあり方と「対」のこととして、石牟礼さんからうかがった（そういう文章を読んだ）覚えがあ

り、そのことがずっと自分の奥底にあつた。必ずしもそれと意識されていなくとも、なされている「有限性」の自覚にもとづいて、わが身から思いが溢れ出ていってしまうような存在としての「悶え神」。書かれたコンテクストは異なるとしても、宮沢賢治の「雨ニモマケズ」のなかにでてる「オロオロ」するさまも「悶え」だろう。

昨年（二〇〇六年）、水俣を訪れたのがたまたま彼岸で、そのとき「本願の会」による、石牟礼さんの自作品朗読のDVD「しゅりりえんえん——水俣魂のさけび」の上映会があつた。「悶え神」の一節を自分の文章に引用した本を編集していたところだったので、水俣で石牟礼さんの朗読をお聞きできたのは、ご挨拶ができたような気持ちになつた。会場にはもちろん、緒方正人さんや杉本栄子さんたちもいらして、石牟礼さんの朗読を一緒に聞くことになりながら、石牟礼さんの作品として紡ぎ出されてきた言葉はどのようなものとして水俣の方々に受けとめられているのだろうかという思いがうかんだ。

石牟礼さんの描く世界に我が身を重ねあわせてもおられるだろうし、いわれなき苦悩を背負うたことの答えをそのなかに見出そうとしてもおられるだろうか。石牟礼さんは、現実にもたことを書かずには済まずことではできなかったであろうし、また、叙事詩とでもいえる作品を書くにあたって、どのような役回りをご自身に課せられたのだろうか。映像に映しだされる石牟礼さんの姿をみながら、あらためて石牟礼さん

こそ「悶え神」なのだど悟つた。以前、ユージン・スミスをとりあげた番組で杉本栄子さんが、上村良子さん智子さん親子の写真を撮つたときのユージン・スミスの心境について、涙ながらにシャッターを切つたに違いないと身悶えしながら語っていた。水俣にはこういう方々がいて、そういう水俣世界のなかで石牟礼さんの作品が紡ぎ出されている。

ここ数年、沖繩の離島の祀りを訪ね歩いて、その場で自分は何に立ち会つているのだろうかと自問することがある。島をあげての祀りのなかでも注目されるのは、蒔いた種子が発芽するのを妨げてはいけなさと物音をたてずにじっと慎むさまである。そこでは、人の気配や精神のありようと作物の生育をうながす天の運行とが相互にかよいあうものとして経験されている。種子が発芽したり蕾が開いたりするのはそのときひとつの世界がうまれることであり、豊穣を祈願して執り行われる祭祀では、一年に一度、世界をうみだしているのである。そうであれば、芸能の奉納に立ち会うとは世界がひらかれるその瞬間に立ち会うことであるに違いない。石牟礼さんの能「不知火」が奉納されるに至つたのも、それが演ぜられることによつてはじめて立ち現れる世界が希求されてのことといえるだろう。

（やなか・しげる／環境社会学・村落社会学）

家中茂、2007「立ち現われる世界」石牟礼道子全集「月報13」